

文庫彩時記 「三集・本棚の漫歩計」「目次」

はしがきに代えて

第一章 父を編^あんだ日

父を編^あんだ日

エドワード・ムーニー・ジュニア 『石を積むひと』 3

遠ざかるターニング・ポイント

増田俊也

『木村政彦はなぜ力道山を殺さなかったのか(上・下)』 9

蚊が騒動

村上元三 『加賀騒動』 14

二割増しと八掛け

山内昌之 『嫉妬の世界史』 20

炎暑に浮かんだ影絵
廻り舞台の陰と陽
驟雨のあとさき

小林英樹『完全版ゴッホの遺言』 25
菊池寛短編『藤十郎の恋』 30
永井荷風『溼東綺譚』 35

第二章 青嵐、峰々を渡る

白い秋、禁忌の歌
丁か半かの年忘れ
初詣はどちらへ
花も嵐も
埋もれかけた家族の履歴書
春なれど 渡る世間は
青嵐、峰々を渡る

伊集院静『白秋』 43
阿佐田哲也『次郎長放浪記』 49
志川節子『春はそこまで風待ち小路の人々』 55
朝井まかて『恋歌』 60
マリーナ・レヴィツカ『おっぱいとトラクター』 66
黒川博行『離れ折紙』 72
乙川優三郎『脊梁山脈』 78

第三章 母たちの春夏秋冬

私だけ、颯爽と
恥ずかしながら
闇商人と山賊
母たちの春夏秋冬
遠く微かな弔鐘
痩せ我慢の美学

雪降り積む古都・小景

桂 望実『嫌な女』 85
安岡章太郎『質屋の女房』 91
グレアム・グリーン『第三の男』 97
船曳由美『二〇〇年前の女の子』 103
宇江佐真理『夕映え』 108
古今亭志ん生『井戸の茶碗』
〔志ん生人情ばなし志ん生の噺3〕より 113
五木寛之『金沢望郷歌』 118

第四章 信じるも信じないも

- 巧たくみの技わざが息づく里 木内昇『櫛挽道守』 125
地味な男の物語 篠田節子『銀婚式』 131
華はなニ憂愁無キニシモ非ズ 沖方丁『はなとゆめ』 137
信じるも信じないも ベリンダ・バウアー『見える女』 143
やっかいなものくつつけて 窪美澄連作長編『ふがいない僕は空を見た』 149
八月が来ると、つい ネヴィル・シュート『パイド・パイパー〜自由への越境』 155
幸薄さちうすき子らの秋 ロバート・B・パーカー『初秋』 161

第五章 堅忍不拔けんじんふぼつの女たち

- 吉原ぶらりぶらり 松井今朝子『吉原手引草』 169

- 幻想あるいは錯覚の譜 ポール・オースター『幻影の書』 175
浮きつ沈みつ 安部龍太郎『等伯』 180
母の〴〵秘密 水上勉『越前竹人形』 186
堅忍不拔の女たち ボストン・テラン『音もなく少女は』 192
間一髪かげろう、のお話し 梶山季之連作短編集『せどり男爵数奇譚』 197
陽炎かげろうの中に揺れる影の如く ウイリアム・アイリッシュ『幻の女』 203

第六章 神おぼの思おもし召めしに委ゆたねよ

- 美麗之島グラフィティ 東山彰良『流』 211
緊迫の公判廷前夜 フェルディナント・フォン・シーラッハ『コリーニ事件』 217
霊験れいげんあらたかの巻 古今亭志ん生『佃祭』（志ん生人情ばなしより） 223
備前岡山の空にかける 飯嶋和一『始祖鳥記』 229

銜てらいも外連けれんもなく
罪つみびとたちの命運いは如何かに

吉村 昭 『夜明けの雷鳴〜医師高松凌雲』 321

豊饒とよたかとして凜れんとして

井上ひさし短編集『秘本大岡政談』 326

安嶋 彌 『千代女と芭蕉』

(『09年版ベスト・エッセイ集〜死ぬのによい日だ』より) 331

エピローグ

第一章 父を編あんだ日